
ロウきゅーぶたさん

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅーぶたさん

【Nコード】

N3361Y

【作者名】

米寿

【あらすじ】

幼い頃のケガでバスケットボールをすることを諦めてしまった少年、しばたながれ柴田流。

バスケットを諦めた流は自堕落な生活を送り続け、いつしか『ぶーちゃん』と周りの友達から呼ばれるようになった。

跳べないのではなく、跳ぶことを止めたこぶた。

そんなこぶたはとある少年と少女たちと出会う。

バスケットに一生懸命な人たちに触れた、こぶたは…。

これは、電撃文庫ロウきゅーぶ！の二次創作です。

ブローグ くボクがこぶたになった日（前書き）

プロフィール

しばたながれ
柴田流

身長：167cm

体重：88kg

血液型：AB型

愛称：ぶーちゃん

好きなこと：バスケットを見ること

嫌いなこと：バスケットをすること

最近のマイブーム：オンラインのRPGで仲良くなった人とのチャット、コンビニの肉まんの食べ比べ

ブローグ　　ボクがこぶたになった日

お父さんの仕事がお休みの日に、ボクたちの家族は牧場に遊びに行った。

そこでは牛の乳しぼりを体験できるらしく、お父さんは前から行くのを計画していたらしい。

お姉ちゃんとボクもそれを聞いてすごく楽しみにしていた。だから、牧場に着くなり早く早くとお父さんとお母さんの腕をとってお姉ちゃんとボクは乳しぼりの体験へと引っ張って行った。

「予約していた柴田ですけど。」

「はい、お待ちしていました。こちらへどうぞ。」

「ねー、お父さん。牛さんは？牛さんは？」

「牛さんどこー？」

「こちら。慌てるんじゃない。いい子にしてお姉さんに着いて行けば、牛さんのところに連れていってくれるからな。」

「「はい。」」

「あらあら。こんな時だけ素直なんだから。」

「それではご案内しますね。」

元気よく返事して係りのお姉さんの後に着いて行くお姉ちゃんとボクを見て、お母さんは笑っていた。

「これが今日牛乳を搾らせてくれる牛さんです。」

「うわあ。」

「立派なもんだな。」

「ええ。そうね。」

お姉ちゃんとボクは牛のあまりの大きさに思わず声が出てしまった。

お父さんとお母さんも牛の大きさに驚いているみたいだった。

「それじゃあ、お姉ちゃんのほうからやってみましょうか。まず、私がお手本を見せるのでその通りにやってみてね。」

「はい。」

ボクは先に出来るお姉ちゃんがちよつぴり羨ましかったけど我慢した。

お姉ちゃんはいつもボクに優しくしてくれるし、お父さんやお母さんに叱られた時も庇ってくれたりしたから、そのお礼だ。

「…とこんな感じです。大丈夫かな？」

「大丈夫です！」

説明を聞き終わったお姉ちゃんが、牛のお乳のところにしゃがみこむ。

お姉ちゃんのことと考え事をしていたボクは、係りのお姉さんの

説明をよく聞いてなかったから、お姉ちゃんがするのを見て真似すればいいやと思った。

「えつと…親指をお乳の根っこのところに…」

「がんばれよー。」

「言われた通りにやるのよー。」

お父さんとお母さんがお姉ちゃんを応援する。ボクも心の中でお姉ちゃんを応援した。

お姉ちゃんは、それに応えるみたいに勢いよく指を動かした。

「えい！わあ！ホントに出たあ！」

お姉ちゃんは係りのお姉さんに教わった通りのやり方でお乳を搾り出した。

でも、あまりに勢いが強すぎたせいか牛の体が少しビクツとなったのにボクは気が付いた。

それと同時にボクの体は動き出していた。

「えつ！？きゃあ！」

「お姉ちゃん！！！」

牛が体をよじってお姉ちゃんを振り払おうと足を振り上げた。

ボクはお姉ちゃんの体突き飛ばしてそれを庇うように前に出た。そこから先の事はよく覚えていない。凄い衝撃と熱さを右肩に感じてボクは意識を失った。

次に気が付いた時には病院のベッドの上にいた。

ベッドの近くには悲しい顔をしたお父さんとお母さん。泣きながら、ごめんね、ごめんねと謝り続けるお姉ちゃんがいた。

「ボクはどうなったの？」

訳がわからないボクはみんなにそう聞いた。

でも、誰も答えてくれなかった。だからボクはもう一度聞いてみることにした。

「ねえ、ボクはどうなったの？」

「……………ご家族の皆様。ここは私から。」

知らない人の声がするほうに首を傾けると、白衣を着た男の人が立っていた。

きっとこの人はお医者さんなんだろう。

「君はお姉ちゃんを庇って右肩をケガしてしまったんだよ。」

そっか。

あの時、ボクは牛が暴れたすのに気が付いて飛び出したんだっけ。

「君のおかげでお姉ちゃんはケガをしないで済んだんだ。」

良かった。

ボクはお姉ちゃんをちゃんと守れたんだ。

でも、なんでお父さんもお母さんも泣きそうな顔してるの？ お姉ちゃんが泣いたままなのはどうしてなの？

「その代わり、君のケガした右肩はもとにもどらなかったんだ。」

え？

「手術は成功したけれど、肩の骨を痛めてしまっていて、右手が肩より上にあげられなくなってしまっているんだよ。」

え？え？

「普通に生活する分には特に問題は無いけれど、スポーツを続けていくのは難しいんだ。」

え？え？え？

「…………バスケット…………出来ないの…………？」

混乱するボクが口に出来たのはそれだけだった。

「……………すまない。」

この一言でボクのバスケットボール生活は終わりを告げた。それは、ボクがミニバスクラブのチームのレギュラーを勝ち取って、最初の大会に臨むちょうど一週間前の出来事だった。

ブログ くボクがこぶたになった日（後書き）

お疲れ様です。

米寿です。

性懲りもなく新連載を開始しました。色々中途半端なのは重々承知ですが、書きたい、読んでもらいたいと思い立ったので始めました。大変ご迷惑をお掛けしますが応援して頂けると嬉しいです。

s c e n e . 1 〰こぶたの日常〰（前書き）

プロフィール

しばたかえで
柴田楓

身長：160cm

体重：43kg

血液型：A型

好きなこと：弟とするバスケットボール

嫌いなこと：弟とできないバスケットボール

最近のマイブーム：お母さんみたいなおいしい料理を作るための料理の勉強

s c e n e . 1 ～こぶたの日常？～

カーテン越しに入ってくる朝日が眩しい。

現在の時刻はA M 6 : 3 0。後ちよつとしたらにリビングへ降りて行かなきゃいけない時間だ。

「……………眠い。」

昨日学校から帰って来た後、夜こばんとお風呂に入る以外はゲームをしていて徹夜だ。

新しく発売したR P Gでついつい歯止めが効かずにやり過ぎてしまった。

まだまだ、やっていたいけど時間が時間なので仕方がない。

「……………ふう。」

軽く息を吐いて重い体をノロノロと起こす。首を捻るとバキバキと骨の鳴る音がした。

右肩を庇いながらゆっくりと伸びをして固くなった体を解している。

そんな風に行っていると、部屋の扉がノックされ、ボクに声かけられる。

「母さんが朝御飯できたって！」

「……………うん、分かった。」

お姉ちゃんがいつも通りに呼びに来て、それをボクがいつも通りに答える。

トットトットと小気味よく階段を降りていく音がする。その音が聞こえなくなつてから、ボクは静かに扉を開いて部屋の外へ出た。部屋から出ると朝ごはんのいい臭いがする。夜にあれだけお菓子を食べたのにすっかりお腹はペコペコだ。

階段を降りてリビングに着くと、既に朝ごはんがテーブルの上に並んでいた。

「…………おはよう。」

「おはよう!」

眠さ全開のボクの挨拶に元氣全開の挨拶でお姉ちゃんが返してきた。

朝一番のこれは、徹夜明けのボクにとってはかなり堪える。

「おはよう。またゲームやってたの?」

「…………まあね。」

「ほどほどにね。」

「…………はい。ふあゝああ。」

お母さんとも挨拶し終わったボクは、あくびを隠すこともせずそのまま椅子へと座った。

どっかりと重たい腰を降ろして、眠い目を擦りながら、テーブルの上に置かれている家族写真に挨拶をする。

「…………お父さんもおはよう。」

お父さんは今、別の県へ単身赴任中で今は家に居ない。だから、これで食卓に家族全員が揃った事になる。

ボクの家ではよっぽどのことが無い限り、皆が揃ってからごはんを食べることになっている。

それを面倒に思うときもあるけど、守らないとお母さんが泣きそうな顔をするから、結局守ってる。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます!」

「……………いただきます。あふつ…………。」

眠さと戦いながら朝ごはんをもそもそ口へ運ぶ。
んー。うまい。

相変わらずお母さんの料理は絶品だ。
量が少し多すぎるのが珠に傷だけど…。

「ね!流?流ってば!」

そんなとりとめのないことを考えていると、お姉ちゃんがボクを呼んでいた。

眠い時に考え事をしてたせいで気が付くのが遅れてしまったらしい。

「……………んん。何?」

「今日は一緒に学校行こ?」

「お姉ちゃん朝練あるでしょ。ボクはギリギリまで寝てから行くから先に行つてて。」

「そつか…。そうだよ…。何言ってるんだろ。あはは…ごめんね?」

「謝らなくていいよ。ごちそうさま。お母さん、ギリギリになったら起こしてね。」

そう言つてボクは席を立つた。

お母さんが何か言いたげにしてたけど、それを無視してボクは自分の部屋へと向かった。

扉を開けて、そのままベッドへと倒れ込む。その衝撃でギシギシとベッドが音を立てた。

「……………はあ。寝よう。」

目を閉じて眠気に身を任せる。徹夜明けのせいか、直ぐに意識が遠くなっていく。

意識が途絶える瞬間、ボクはベッドの側で力無く笑いかけるお姉ちゃんの顔を見た気がした。

s c e n e . 1 くごぶたの日常?? (後書き)

私事ですが、職場でのストレスからか、白髪と抜け毛がひどい。

本当におじいちゃんへの階段を登り始めました、どうも、米寿です。

お疲れ様です。

少しでも楽しんで頂けたなら嬉しいです。

宜しければ、また、お付き合い下さい。

御一読ありがとうございます。

s c e n e . 1 〰 じぶたの日常〰 (前書き)

プロフィール

しばたあけみ
柴田朱美

身長：162cm

体重：シークレット

血液型：A型

好きなこと：お料理

嫌いなこと：家族が揃わない食卓

最近のマイブーム：娘にお料理を教えること、
息子が好きなお菓子作り

scene・1 くづたの日常??

時間になってお母さんに起こされるままに家を出た。

ボクが通う慧心学園は近くのバス停からスクールバスが出ている。これに遅れると大変なことになるから、いくら眠くても我慢しなきゃいけない。

朝のお姉ちゃんとのことがあって、ボクの足どりはとても重い。出来れば学校を休んで一日中ゲームをしたいぐらいだ。

そんな事を考えながら歩いてようやくバス停に到着すると、ちょうどバスがやってきた。

「…………おはようございます。」

「はい。おはよう。」

運転手さんにあいさつをして、のそのそと席へ向かう。

適当に空いている後ろの席に座ろうかなと思って通り過ぎようとした前の席から声かけられた。

「おい、柴田。隣空いてるからここ座れよ。」

「…………ああ、竹中くん。おはよう。…んん？竹中くんなんでバスに？」

彼の名前は竹中^{たけなかなつひ}夏陽。慧心学園男子バスケットボール部、通称男バスのキャプテンをしている。

竹中くんとは以前ちよつとした縁があつて、今は友達同士だ。

でも、竹中くんの家は慧心学園の近くで、普段はバスに乗っていないことはないはずなだけだ。

「おう、おはよう。まあ朝からちよつと用があつてな。…つてお前スゲー眠そうじゃなか。どーせまたゲームでもやってたんだろ？」

「朝から大変だね。そして、竹中くんにはお見通しかあ…………ふあゝあ。」

「ったく。そんなことより早く座れよ。バスが発車しちまう。」

「うん。ありがとう。」

せつかく誘ってもらったんだし、ありがたく座らせてもらおう。ボクは座席に深々と体を預ける。このバスの椅子はふかふかで寝心地がとていいから、学校に着くまで寝ていよう。竹中くんがいるから着いたらきつと起こしてくれるだろうし。

そんな勝手なことを考えながら目を閉じようとしたボクを見透かす様に、竹中くんが話しかけてきた。

「寝んなよ。色々話あんだから。」

「…………学園に着いてからだと話にくいこと？」

「ああ。まあ…な。」

いつもストリートな竹中くんにしては珍しく齒切れが悪い。ボクを隣の席に呼んだのは、この話をするためだったんだろう。

嫌な予感がするし、眠いけど、聞かないなんて出来る感じじゃなさそうだ。

だって、竹中くんの目がすまなそうにボクを見つめているから。

「…………いいよ。それでなんの話？」

「俺たちこの前の地区大会で優勝して、県大会に出ただろ？」

「うん。」

「でも、県大会じゃボロ負けだった。あんな悔しい思いをするのはもうゴメンだ。」

竹中くんはその時の気持ちを思い出したのか、ギリツと奥歯を噛み締めた。

ボクもその場にいたから分かるけど、レベルの違いを見せつけられた、それだけが残る試合だった。

「うん。」

「だから、もっと練習して強くなりたいてって、柴田が休みの時に顧問に相談したんだ。」

バスケットが好きで、負けず嫌いな竹中くんらしい提案だ。そして、話の流れが読めてきた。なんとなく次の展開を予想できる。

だから、ボクは先に自分の口から言ってしまうことにした。

「それで顧問と美星先生がもめて、収まりがつかなくなったんでしょ？」

美星先生は最近出来た女子バスケットボール部、通称、女バスの顧問の先生。

男バスの顧問とは仲が良くないので、ことあることに衝突を繰り返している。

「そうなんだよ。それで結局、体育館の使用権を賭けて女バスと試合をすることになったんだ。」

「そっか試合か。」

理屈や話し合いじゃなくて、勝負でちゃんと白黒つけるってところが、美星先生らしい。

「女バスが勝てばこれまで通りに体育館の割り当ては週3日ずつ。俺たちが勝てば6日もらえる。」

この条件だけ聞けば、勝っても今まで通りの練習時間を守れるくらいで、女バスにメリットがある様には見えない。
つまり、美星先生がこの勝負を受けた、もしくは受けざるを得なかった理由があるはず。

それが、竹中くんがボクにこの話をするのをためらった理由にもつながっている。

「女バスが負けたら………廃部だ。」

「そっか。」

「……………ああ。」

女バスは部員が五人しかない。そしてボクも竹中くんも女バスの部員みんなと同じクラスで顔見知り。そして、経験者一人を除いてみんな初心者だ。

普通に考えれば女バスに勝ち目はないし、このまま廃部になって

しまうだろう。

竹中くんはこの学園でボクがバスケットしていたのを知っていて、辞めた理由も知っている数少ない人だ。面倒見が良くて根が優しい竹中くんは、ボクと同じ想いを女バスのみんなにもさせてしまうんじゃないかって思ってる。

でも、二度と悔しい思いをしないためにもっと強くなりたくて、だから迷っている。

竹中くんがボクと出会っていないければ、きっと迷わないでいられたはずだ。

「試合はいつやるの?」

「再来週の日曜日。」

「勝って練習時間が増えるといいね。」

なら、竹中くんの背中を押すのが、今のボクの役目だ。

バスケットをすることを勝手に諦めてしまったボクのために、竹中くんが悩むことなんてない。

「おう!」

ボクがそう言って安心したのか、笑顔で力強く返事を返してくれた。

それを見てボクも安心した。これ以上、ボクが誰かのバスケの重荷になるのは嫌だったから。

「つーか、柴田。他人事みたいにしてるけどお前にも関係あんだからな。お前、男バスのマネージャーなんだぞ?」

「……………そうだったね。」

「そうだったね、じゃねーよ。それになんだよ今の間は？」

「あはは。眠くて少しボーッとしちゃっただけだよ。」

「ならいいけどな。今日も練習あるんだから眠くても来いよ。」

「うん。分かったよ。」

ボクの返事を聞いた竹中くんは満足そうに頷いた。

その顔を見てボクは、とっさに出そうになった、バスケットをやれない人が来てもしょうがないという言葉を読み込むしかなかった。

「いろいろ悪かったな。着いたら起こしてやるから寝ろよ。部活に来れなかったら意味ねーし。」

窓の外に顔を向けたまま、竹中くんはボクにそう言った。きっと照れ隠しなんだろうけど、バレバレだ。

でも、せつかくの好意だから甘えさせてもらおうと思う。

「じゃあ、ヨロシク。お休みなさい。」

「ああ。」

眠い中、いろいろ考えたせいか、目を閉じた瞬間に強烈な睡魔に襲われた。

もちろん、ボクは抵抗せずに身を任せて、深い眠りへと落ちていった。

眠りに落ちる直前、三度寝できるなんて贅沢だなーと密かに思っ

た。

s c e n e . i 〱こぶたの日常〱 (後書き)

代車の鍵を紛失し、明日は土下座まっしぐらの米寿です。

お疲れ様でした。

御一読ありがとうございます。

プライベートが非常に波乱に満ちていますが、がんばっていますよ
ー私。

では、また宜しくお願い致します。

s c e n e . 1 〰 じぶたの日常〰 (前書き)

プロフィール

しばたよしあき
柴田良秋

身長：185cm

体重：78kg

血液型：B型

好きなこと：家族旅行

嫌いなこと：単身赴任

最近のマイブーム：夕食時、家族とのテレビ電話で一緒の食卓を囲むこと

scene・1 くぶたの日常??

三度寝なんて贅沢なことをしても、ボクは眠いままだった。徹夜でのゲームとバスでいろいろ考えごとをしたからか、サッパリ頭が回らない。

そんな訳で、ボクは竹中くんの後をフラフラしながら付いていく。顔を上げてはいるものの、まぶたが重くて視界がぼやけていて定まらない。

おまけに息まであがってきた。正直…キツイ。ボクのクラスまでこんなに遠かったかな。

「おい柴田、そろそろ教室着くぞ。」

竹中くんにそう言われて、首をあげて教室にあるクラスのプレートを確認する。

6-C。間違いない。やっと着いた…。

「はあ…ふう…。かなりの…道のりだったね。」

「…いや。大した距離じゃねーし。」

教室に着いたという達成感を込めたボクの言葉に、竹中くんは呆れた目でつれない返事を返す。

竹中くんにとってはなんでもない距離だろうけど、ボクにとってみれば結構な距離。

校門から教室までなんて、体育の50m走に匹敵するっていうのは言い過ぎだけど、それくらい疲れる。

「ったく。ちょっとは運動しろよ。そんなんだから、あんなあだ

名で呼ばれるんだぜ？」

「ボクはインドア派だよ。それに、あのあだ名は嫌いじゃないから別にいいんだけど。」

「はいはい。んじゃ、さっさと教室入ろーぜ。」

「うん。」

運動した方がいいってことはよく言われる。そしてそのたびにボクはインドア派だと答える。そして、ボクと話をしたり、体型を見てみんなは大体納得してくれる。

君は確かにインドア派だねって。もちろん例外な人もいるけど。ドアを開ける竹中くんが続いて教室に入ろうとした時、前から大きな声がするのが聞こえた。

「やべー。紗季が怒った！逃げろー！」

「待て！バカ真帆！」

「うおっ！？」

金色に近い栗色のツインテールを振り乱した女の子が、勢い良く飛び出してきた。

竹中くんは、持ち前の反射神経でそれをなんとか身をよじってかわした。

竹中くんがなんとか、かわしたそれを死角になっていたボクがかわせるはずがない。

ぶつかる瞬間、女の子と目があった。お互い、これから起こることに予想がつくけど、もうどうしようもない。

「「あ。」」

そんなマヌケな声をあげて、ボクは女の子の下敷きになって倒れ込んだ。

廊下に後頭部がぶつかって視界がチカチカする。息がつまったみたいで上手く吐き出せない。

このまま、意識を失ってしまえば授業を受けなくていいし、眠れて一石二鳥じゃないか。

よし。そうしよう。では、お休みなさい。

「ぶーちゃん！大丈夫！？ねえ！起きてよっ！」

ボクのどうしようもない考えは、女の子の必死な叫び声にかき消された。

前もどこかで、こんな風に誰かに呼ばれた気がする。

ああ、あの時だ。

起きなきゃ。起きないとずっとお姉ちゃんは泣いたままだから。

後頭部がチリチリしだして痛みが戻ってきた。でも、眠気覚ましにはちょうどいい。

「……………大丈夫。ケガはない、三沢さん？」

「ぶーちゃん！！よかったあ…。」

「柴田っ！大丈夫かつ！？」

目をあけるとクラスメイトでボクにぶつかった三沢真帆みさわまほさんと竹中くんが心配そうな顔で見つめていた。

大丈夫だって言ったのに二人とも心配性だ。後頭部は確かに痛い

けど、ただそれだけ。

「柴田くん。大丈夫？」

声がかけられた方に視界を移すと、眼鏡をかけたおさげのクラス委員長、永塚紗季さんながつかさきも心配そうにボクを除き込んでいた。

なんだか、騒ぎが大きくなりそうな予感がしたボクは、重たい体を起こすことにした。

それにボクみたいに大きいのがクラスのドアをこれ以上塞いだら、みんなに迷惑がかかってしまう。

「ボクは大丈夫。心配かけてゴメンね、永塚さん。今、起きるよ。といっても三沢さんがどいてくれないと起きられないけどね。ははは……。」

「あ……ゴメン……。」

「いいよ。よっ！ふっ！」

三沢さんにどいてもらい勢いをわざと勢いをつけて起き上がる。こうでもしないと、三沢さんはいつまでも気にしてしまう。今だって俯いているせいで、トレードマークのツインテールが元氣なく垂れ下がっているし。

後はもう一度、ボクが三沢さんになんともないことを伝えればそれで済んじやう話だ。

「……………行こうぜ、柴田。こんなやつのことなんか気にすることねえよ。」

立ち上がったボクの腕を竹中くんが引く。

ボクの腕を掴んだ竹中くんから静かな怒りの気配を感じる。それ
もかなり怒ってるみたいだ。

ボクは大丈夫だし、三沢さんにもケガがなかったんだからそんな
に怒ることないと思うんだけどな。

「んだよ、夏陽！どーゆー意味だよっ！」

「ふん…言葉通りの意味に決まってるだろ。」

売り言葉に買い言葉。 前からよく言い合いになることはあつ
たけど、女バスが出来てからは特にそれが目立つようになった。

「竹中くん、そんなにキツく言わなくても…ボクはこの通り大丈
夫だったんだし。」

「真帆、落ち着きなさい。」

だからボクは二人の間に割って入った。 永塚さんも三沢さんと竹
中くんに距離をとらせるために間に入る。

それでも二人は睨みあったまま。二人は前からよく言い合いにな
ったりすることがあったけど、女バスが出来てからは特に多くなっ
た。

ここにいる永塚さんも含めて三人は幼なじみだ。竹中くんは、真
帆は前から気に入らなかったって、よく憎まれ口をたたいていたけ
ど、ここまでハッキリ怒るなんてことはなかった。

「気付いてないみてーだから言っとくけど。」

「なんだよ。」

「お前さ、おかしいと思わなかったのか？」

「何をだよ？」

「柴田がお前の下に倒れたことだよ。」

「それは、アタシがスグースピードでぶーちゃんに突っ込んだからだよ？」

「はっ。」

三沢さんの答えを竹中くんが鼻で笑った。そんな簡単なことも分からないのかとバカにした感じた。

それを見た三沢さんがヒートアップ。間にいたボクと永塚さんを押し退けて竹中くんへと詰め寄る。

「言いたいことがあるなら、ハッキリ言えよ夏陽！」

「ちよつと真帆！落ち着きなさいって！夏陽もなんで挑発するわけ？」

三沢さんを止めに入って、竹中くんへを諫めようとした永塚さんを、竹中くんは無視して言葉を続けた。

「柴田はな、お前を庇って自分から後ろに倒れたんだぞ。」

「え？」

「いくらいきなりお前が突っ込んできたからって、柴田とお前じや体格が違いすぎる。普通にぶつかれば、お前が吹っ飛ばされるに

決まってるだろ？それじゃ、お前がケガするかもしれねーから、柴田は自分から後ろに倒れたんだ。そんなことも分かんねーのかよ？」

竹中くんはそう一気にまくし立てた。

詰め寄っていた三沢さんから勢いが消え、頼りなげな瞳がボクに向けられる。その瞳は、ボクに本当なの？と言外に問いかけている。正直に言うべきか、ボクは迷った。そもそもこうなるのが嫌だったから、何度も大丈夫だよって言ったんだ。けど、竹中くんはそれを見過ごしてはくれなかった。…うーん。どうしよう？

「おはよー。って、入り口に集まってどうした？」

ボクが三沢さんになんて声をかけていいか迷っていると、担任のたかむらみほし 簗美星先生が教室へと入ってきた。

なんてタイミングの悪さだ。簗先生は基本的にいい人なんだけど、関わりと何かと事態が面倒な方向にいつてしまうことをボクは去年から知っていた。そして、この法則に例外はないということも。

「ちょうど良かった。柴田が真帆とぶつかって頭打ったから、保健室に連れて行ってやってくれよ。」

「ホントか？柴田、大丈夫か？」

「いや。ボクは大丈夫…。」

「いいから行って来い。」

ボクの意見は竹中くんに遮られてしまった。やっぱりこうなっちゃったか。三沢さんのことは気がかりだけど、しょうがない。

いまさら、この流れに逆らえると思えないし、おとなしく言うことを聞いておこう。

「分かった。詳しい話は柴田と、後で真帆と竹中にも聞く。それじゃ、行くよ。」

「はい。」

「そうだ、紗季。」

「なんですか？」

「私はホームルーム遅れるから、ヨロシクな。」

「分かりました。」

そんなやり取りを終えて、ボクは簗先生と一緒に教室を後にした。教室から出ていく時、何か言いたそうな三沢さんの顔が見えたけど、ボクはおとなしく保健室に付いていくしかなかった。

scene・1 くくぶたの日常? (後書き)

職場で自分の歓迎会が開かれることになったと喜んでいたら、実は自分プロデュースだったという畏に愕然とた米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

今回の話、真帆好きの方いらっしゃいましたらすいません。

因みに私も真帆派なので書いていて辛かったです。そんなことは聞いてないですか…ですよね。

ではでは、またまた。

S e n c e . 1 〱こぶたの日常〱（前書き）

ガールズ・トーク〱休み時間〱

【智花】真帆、元気ないね。どうしたの？

【真帆】うーん。朝からちょっとマズイことやっちゃったんだよね
…。

【愛梨】それって、もしかして柴田くんが保健室に行ってるのに関係あるのかな？

【紗季】そうよ。朝、真帆が柴田くんとぶつかっちゃってね。一歩間違えば真帆がケガしたかもしれないんだけど、柴田くんが庇ってくれたおかげでケガせずに済んだのよ。

【ひなた】おー。ぶーはイイ人。

【紗季】そうね。でも、真帆がその時にちゃんと謝まらなかったせいで、夏陽が怒っちゃって…。

【智花】そんなことがあったんだ…。

【真帆】そうなんだよ。それにちゃんとお礼もしてないしさ。ぶーちゃん、みーたんに保健室にすぐ連れて行かれちゃたし…。

【愛梨】それなら、皆で真帆ちゃんを助けてくれてありがとって言いに行くのはどう、かな？

【ひなた】おー。あいり、ナイスアイデア。ついでにぶーの好きな給食もお届けする。

【紗季】そうね。いい考えだと思うわ。

【真帆】給食持って行けばぶーちゃん喜ぶだろうし、謝りに行けて一石二鳥だ！早速みーたんに聞いてこよう！

【紗季】ちょっと！真帆待ちなさい！…って、行っちゃったわ。

【智花】あはは…。

【紗季】でも、柴田くんには本当に感謝してるわ。もし、真帆がケガしたら、今度の試合出られなくなってたから。

【愛梨】そうだね。柴田くん男バスのマネージャーさんなのに助けてくれたんだもんね。

【ひなた】おー。ぶーはいつも優しい。ひなの苦手なもの食べてくれたことある。

【智花】それは何か違う気がするけど…。それじゃあ、真帆が戻って来たら皆で保健室に行こう。

【三人】おー！

S e n c e ・ 1 〱 じぶたの日常〱

今、ボクは保健室のベッドにいる。

朝のことを篁先生に説明して、保健室の羽田野先生はたのに診てもらって特に問題なかったので、とりあえず安静にということになり、ベッドで寝ることになった。

ボクがもともと朝から眠かったのもあって、意識は一瞬で落ちた。目が覚めたのはついさっきで、理由はお腹が空いたからだ。

体を起こして、保健室の時計を確認する。既に時間はお昼休みが半分ぐらいなっていて、朝から随分時間が経ってしまっている。どおりでお腹が空くわけだ。

そこでボクは重大なことに気がついた。それは、この時間にボクの分の給食が残っているのかということだ。慧心学園の給食はなかなかおいしい。それを逃すなんてことは絶対避けたい！

よし！そうと決まれば早速行動開始だ。膳は急げもとい、善は急げ。

「羽田野先生。もう大丈夫そうなので、教室に戻ります。」

先生に声をかけたのだが反応がない。ベッドの前のカーテンを開けるとそこには誰もいない。

なぜいない！勝手に出ていくわけにもいかないし、これじゃあ給食が食べられない！…終わりだ…もう何もかもが…終わりだ。

「ははっ…ははは…。はあ…寝よう。」

ノロノロとした重い足どりでベッドまで戻り、中に入り直す。こうなったら、部活の時間になるまで具合が悪いことにして寝てしまおう。給食という学園での楽しみを奪われたんだから、それく

らいしてもバチは当たらないはずだね？食べ物の怨みは怖いって言葉もあるくらいだし。

ベッドの前のカーテンを閉め、1日に五度寝という快挙？を成し遂げようとするボクを、扉をコンコンとノックする音が阻止した。

「失礼します。」

「失礼します。」

「おー。しつれいします。」

保健室に声が響く。その声にはボクは聞き覚えがあった。そして、誰が来たのかをだいたい予想できた。

「ぶーちゃん、起きてる？」

「うん、起きてるよ。」

この遠慮がちにかけられる声は三沢さんのだ。

寝たまま出迎えるわけにもいかないので、ボクは体をベッドから起こしてから返事を返した。

「カーテン開けるわよ？」

「うん。」

このハキハキした感じの声は永塚さんのだ。

ボクの返事を待ってからゆっくりとカーテンが開けられる。

開けられたカーテンの先には五人のクラスメイトが立っていた。

そこにいたのは、ボクの予想を裏切らず、慧心学園女バスのメンバーだった。

「ぶーちゃん！ホントにごめんなさい！」

ボクの姿を見るなり、いきなり三沢さんが謝ってきた。

突然の謝罪に驚いたボクは、呆気にとられてすぐに返事をするこ
とができなかった。

「あたしからぶつかって、ぶーちゃんにケガさせたのにちゃんと謝れなくて……あー！うまく言えないんだけど、ごめんなさい！」

三沢さんは頭を下げながら、また謝る。

わざわざそれを言うために来てくれたんだ。やっぱりあの時、一言声をかけておけばよかった。そしたら、余計な心配をかけずにすんだのに。

でも、それはもう過ぎたことだ。折角謝りに来てくれたんだから、キツチリ謝罪の気持ちを受け取ってこの件は終わりにしよう。

「わざわざ謝りに来てくれて、ありがとう。三沢さんも謝ってくれたから、この話はこれでおしまいしよう？」

「うん！ありがとう、ぶーちゃん！」

向日葵みたいな元気な笑顔で三沢さんが頷いた。

いやいや、なんとか一件落着。

でも、そうすると気になることがある。ただ謝りに来るなら三沢さんだけでよかったのに、女バスのメンバーが全員で来たのはなんだろうか？

「ぶー、まだ、あたみたいの？」

ボクを『ぶー』と呼んだのは、袴田はかまだひなたさん。

ボクが頭の中で自問自答している顔を見て、痛みに顔をしかめた
と思ったんだろう。

袴田さんは、ふわふわした髪を、ふわふわさせて、ふわふわと近
づいて来て、ボクの顔を覗きこんだ。

「ううん。もう大丈夫。」

「おー。それならよかった。」

いけない、いけない。自分でこの話はおしまいって言うておきな
がら、心配をかけたら本末転倒だ。

それに、なんで皆が来たのかだって、考えるんじゃなく、直接聞
いてしまえば済む。

「皆が来てくれたのは嬉しいんだけど、どうして皆で来たの？」

「えっと、ね。美星先生と羽田野先生にし、柴田くんがお腹すか
してるから、保健室に給食を持って行ってって、た、頼まれたから
…それと…。」

「ほ、ホント!？」

「ひゃう!」

給食という単語に自分を抑えられず、香椎さんがいいかけた言葉を
遮って、つい大きな声が出てしまう。

保健室に給食を持ってきていいのかとか、色々ツツコミ所はある

けど、ありがたく頂くとしよう。

でも、その前に驚かせてしまったことを謝らなきゃいけない。

「ごめんね、突然大きな声出して。」

「ううん。ちょっとビックリしちゃっただけだから…。」

ボクの謝罪に、俯きながらも、ちゃんと応えてくれたのは、香椎^{かしい}愛莉^{あいり}さん。ボクも背は高い方だけど、香椎さんはそれよりも少し高い。

でも、本人はそのことをとても気にしていて、今も大きな体を小さく小さく縮こませている。

「トモ。柴田くんは我慢の限界みたいだから、早く給食を渡してあげましょ。」

「あ、うん。でも、ベッドに持っていくと汚しちゃうかもしれないから、こっちの机に置くな。」

永塚さんにトモと呼ばれたのは、湊^{みなと}智花^{ともか}さん。

女バスで唯一のバスケット経験者。普段はとても大人しそうな雰囲気をしているけど、バスケの時はまるで正反対の空気を纏う。

始めてそれを見た時、本当に驚いたのを今でもボクは覚えている。それぐらい湊さんの変わり身は凄かった。

「ありがとう、湊さん。」

「うん、どういたしまして。」

ボクはベッドを抜けて待ち焦がれた給食のもとへ向かう。
ここから給食が置かれた机までの距離さえもどかしい。それぐら

い、ボクのお腹は空腹を訴えていた。

辿り着いたボクを迎えてくれたのは、サンドイッチとホワイトシチューにサラダ。どれもとてもおいしそうだ。

「いただきます。」

聞きたいこともあるけど、空腹をこれ以上我慢できそうにない。そんなに時間もかからないから、ちょっと待っててもらおうしよう。ボクは挨拶をして、皆がいるのに構わずもの凄い勢いで給食を食べ始めた。サンドイッチもシチューもサラダもみるみる内になくなっていく。

そんなボクの様子を五人は驚いた顔で見つめていた。

「ふう…ごちそうさまでした。」

サラダの上に乗っていたミニトマトを口に放り込んで飲み込み、食後の挨拶で締める。

おいしかった。お腹もいっぱいになったし、さつき香椎さんが言いそびれてたことを聞いてしまおう。

「給食持ってきてくれてありがとう。それで、香椎さつきはなんて…って、みんなどうしたの？」

「どうしたのじゃないよっ！ぶーちゃん食べるの早すぎだからっ！」

「そうかな？」

「柴田くん。自覚無いのね…。」

勢いよく捲し立てる三沢さんとヤレヤレと肩を竦める永塚さん。
お腹が空いてる時、ボクはいつもこの調子だし、竹中くんも特に何も言わなかったから変だと思っていなかったけど、どうやら違うらしい。

二人だけじゃなくて他の三人も、ウンウンと頷いているのがその証拠だ。これからはもう少しゆっくり食べることにしよう。

「ボクの食べ方はこの際いいとして、さっき香椎さんは、ボクになんて言おうとしたの？」

「えつとね。私たち柴田くんにお礼がしたくて来たんだよ。」

「お礼？」

「うん。朝のこと聞いたよ。真帆をかばってありがとう。」

聞き返すボクに、香椎さんの後を引き継いで、湊さんが答えた。

「今度、男バスと試合があるのは柴田くんも知ってるよね？」

「うん。」

「私たちは五人しかいないから、誰か一人でもケガしたら試合が出来なくなっちゃうところだったの。柴田くんは男バスのマネージャーなのに、真帆を助けてくれた。だから、皆でお礼を言いに来たの。本当にありがとう！」

「……ありがとう！」

そういつて女バスの皆は頭を下げた。

頭を下げられたボクは困ってしまった。体が勝手に動いただけで、たまたまそれが三沢さんを庇うという結果につながっただけ。

でも、女バスの皆からしてみれば、ボクが三沢さんを庇った結果、ケガをせずに済んだわけだから、感謝しているし、お礼を言いたい。そうだった。自分のしたことが相手にどう思われるかなんて、結局のところ受け取り方次第なんだって、そんな当たり前のことをボクは忘れていた。

いや、忘れていたかったただけだ。ボクとお姉ちゃんは、それで変わってしまったから。

ダメだ。この思考の流れはマズイ。こんなことを考えても何もいいことなんてないし、皆とお姉ちゃんを重ねるなんてやつちやいけなないことだ。

「どういたしまして。わざわざ、ありがとう。もう授業始まるよ？ボクは後で行くから皆は先に教室に戻ってて。」

だからボクは、思考の流れを絶ちきり、皆に素直にお礼を言って、保健室から遠回しに帰る様に誘導した。

ボクがそんなことを思っているなんてことを知らない皆は、頭を上げて笑顔でボクを見た。

「じゃー後でね、ぶーちゃん！」

「柴田くんも遅れないようにね。」

「おー。ぶー。あとでね。」

「えへへ。それじゃ、失礼します。」

「それじゃあ、教室でね。柴田くん。」

そして、女バスメンバーの皆がそれぞれに挨拶をして保健室を出て行く。

全員が出て行ったのを確認して、ボクは深く息を吐いた。

「……………なんか、疲れたなあ。」

録に授業も受けてない上に保健室でさっきまで寝ていたはずなのに、思わずそう呟いてしまった。朝のお姉ちゃんとのやり取りや、竹中くんの相談に三沢さんのこと。まるで、停滞しているボクを急かすように、何かの歯車が回り始めたように感じる。もちろん考えすぎなのかもしれないけど、あまりにタイミングがいい。

きっと今日の部活でも何かありそうだ。なら、少しでも休んだほうがいい。

「はあ…先生が戻って来るまで、もう一眠りしよ。」

そう勝手に結論付けて、半ばヤケクソ気味に、ボクはさっき阻止された一日に五度寝の自身最高記録へ挑むことにした。

いつもは至福を感じるベッドの中でも、ボクのモヤモヤした気持ちには晴れそうになかった。

S e n c e . i 〳〵ぶたの日常?〳〵 (後書き)

自分の歓迎会なのに絡み酒のバイトに捕まり、あげく逆ギレされた米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

お酒の力恐るべし。

飲んでも吞まれない様に気を付けなきゃいけないと思わせてくれるいい教訓になりました。

そんな米寿はスーパーの駐車場で爆睡。危つく仕事に遅刻しそうになりました。

皆様もくれぐれもご注意を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361y/>

ロウきゅーぶたさん

2011年11月17日20時20分発行